

梅雨の長雨と雨が降らない時の雨乞いに見る龍神と神の関係

1 日本人に嫌われた雨と国の基礎になった雨の神

6 月は梅雨の季節です。毎日スッキリしない天気、また洗濯などもなかなかできずに、困っている人もいるのではないのでしょうか。もちろん、雨がなければ農作物は育たなくなってしまうわけですし、人間も飲み水が無くなってしまいます。しかし、そのような状態で、非常に重要なものだと分かっている、日本人はそんなに雨のことは好きではありません。

晴れの日には「日本晴れ」といって、非常に良いものの例えに使われます。このほかにも「あっぱれ」などは「天晴」と書き、非常に素晴らしいこと、善いことをしたときの例えとして、良い天気であることに例えますね。一方「雨」というとあまり良くないイメージで使われます。例えば「雨降って地固まる」などという言葉があります。これは「雨」が「障害」と考えられていて、その障害があった方がより一層結束力が強まるといった考え方です。このように「雨」というのは、「致命傷ではないものの、人間が耐えなければならない障害である」というような感覚でとらえられています。

このほかにも、さまざまな苦労や障害があっても成し遂げようとするものの例えとして「雨が降ろうと槍が降ろうと」などといいます。雨と槍が並列で並んでいるところがなかなか興味深いのです。天から降ってくる、要するに、自分の力や努力では避けようがない状態で降りかかってくる障害という意味で「降る」という言葉を入れ、その障害をさすものの中に「雨」と「槍」という「天気」という自然のものと「槍」という「人工的」なものを組み合わせ、さまざまなパターンの障害を表現しているということになります。

その雨ですが、日本では、古事記では淤加美神（おかみのかみ）、または、日本書紀では霽神（おかみのかみ）が罔象女神（みつはのめのかみ）とともに、日本における代表的な水の神ということになります。この水の神は、伊邪那美命が「神産み」の際に、火の神である迦具土神を生んだやけどが元で亡くなってしまいます。これに怒った伊邪那岐命は、迦具土神を切り殺してしまいます。その時に生まれた神がこの水の神であるとしています。

神話はあまり科学的ではないという人がいますが、実際に火の神を殺すのに、水の神が生まれてくるというように、自然現象をしっかりと踏まえて神々が生まれるというように形にしているのです。火事などになった時に、水で火を消すということから、このような神話になったのではないのでしょうか。

ちなみに、この時生まれた高龔神（たかおかみのかみ）は貴船神社（京都市）の祭神となっています。京都の人々が水を非常に重要視したのがよくわかる場所ですね。また、この水の神である淤加美神の娘は、川の神で出雲の簸川（ひのかわ）に深く関係するとされている日河比売命（ひかわひめのみこと）です。その日河比売命と三貴神の須佐之男命の孫で布波能母遲久奴須奴神（ふはのもぢくぬすぬのかみ）と結婚します。二人の神の間に生まれた深淵之水夜礼花神（ふかふちのみづやれはなのかみ）の孫が大国主神なのです。

要するに、水の神である淤加美神の玄孫が出雲大社にまとめられ国を任せられた大国主命ということになるのです。ある意味で、国を治めるための根本のところに水を治めなければならぬ、ということをしかりと神話の中に込めていたのではないのでしょうか。

2 世界各地にある雨乞いの歴史

日本人と水ということに関しては、ほかの国よりも深刻なことは少なかったようです。日本は、山が高くまた海までの距離が近いために、水はどこでも飲めますし穴を掘れば井戸水が出るところが非常に多くあります。山には、湧水が出るところも多く、水の恵みには苦労しません。

それでも雨が少ないと、農作物が不作になってしまい、人が水不足で生死を分けるほどではないにしても、農作物、特に水が欠かせない稲作には非常に大きな問題になります。

そこで、水不足になると「雨乞い」ということを行います。

「雨乞い」とは、水の神に祈って、雨を降らせてもらおうというものです。さまざまな技法があるようですが、一般的なのは、護摩壇を作って、護摩を焚き、そして天に向かって山伏が何らかのおまじないを行うというものではないのでしょうか。

日本書紀によると、雨乞いの起源は蘇我蝦夷と皇極天皇の時代であるといわれています。

戊寅。羣臣相謂之曰。隨村々祝部所教。或殺牛馬祭諸社神。或頻移市。或禱河伯。既無所効。蘇我大臣報曰。可於寺寺轉讀大乘經典。悔過如佛所訟。敬而祈雨。

庚辰。於大寺南庭嚴佛菩薩像與四天王像。屈請衆僧。讀大雲經等。于時。蘇我大臣手執香鑪。燒香發願。

辛巳。微雨。

壬午。不能祈雨。故停讀經。

八月甲申朔。天皇幸南淵河上。跪拜四方。仰天而祈。即雷大雨。遂雨五日。溥潤天下（或本云。五日連雨。九穀登熟。）於是。天下百姓俱稱萬歲曰至德天皇。

日本書紀の文章によると、皇極天皇元年である642年7月25日から蘇我蝦夷が雨乞いのため大乘経を輪読させたが、微雨しか降らなかった。それで29日に寺に輪読を止めさせた。しかし、8月1日に皇極天皇が天に祈ると、突如大雨が5日間も連続で降り、天下万

民は共に天皇を称えたと書いてあります。

日本書紀が編纂されたのは、平安時代ですから、当然に藤原氏の力が非常に強く、その藤原氏は、さまざまな功績があるものの、やはり大化の改新で中大兄皇子と一緒に蘇我氏を滅ぼしたことがあげられます。その意味において、日本書紀の記述は蘇我氏には厳しく、天皇や藤原氏には優しくなっているというのが普通です。

また、中国からの伝来の大乘経を輪読するというよりも、日本の天皇が古式に則って日本の神々に訴えた方が効果があるというような意味にもとれます。特に古事記ではなく日本書紀であり、それは中国に対して日本は歴史があるということを示している書物であるということを考え併せると、なおさら、そのように読めてきます。

さて、雨乞いは、いくつかのパターンがあります。大まかに分けると「お願いする」というもの、「呪術や生贄をささげる」というもの、あるいは「怒らせる」というものになります。この中で特徴的なのは、「怒らせる」というものではないでしょうか。風習の中では、わざと綺麗な水を汚す、あるいは、水神の社に水をかけるというものがあります。

これらは、日本人の多くが、水の神を「擬人化」しているということから生まれる風習です。神々が住んでいるようなきれいな水を汚すと、神々は、自分の居場所を掃除するに違いない。その時は、雨を降らせてきれいな水を多く流し込み、そのことによって綺麗にするであろう、というような考え方です。だから、水が使えなくなるような決定的な汚し方はしません。また、水神の社に水をかけるというのは、「水神が頑張らなくても、水は十分にありますよ」というような、逆説的な内容で神々に雨を降らせるという内容になります。日本人は、神々が自分たちの身近にいるものであると考えていますから、その神々の心理も、自分たち日本人と同じようなものとしているのです。

ちなみに、このような神々をもっているのは、日本だけではありません。ギリシア神話には雨の神はたくさんいます。ゾロアスター教ではティシュトリヤという神がいます。星と慈雨の神でシリウスを神格化したものといわれています。特に古代イランにおいては、シリウスが夜明け前に見える頃が雨季の始まりであったことから、雨の神としての信仰は深くあるようです。同じ地域に、ゾロアスター教の後に信仰が深まったイスラム世界では「イステイスクー」と呼ばれる降雨祈願があります。

また、古代バビロニアからエジプトにかけては慈雨の神バアルがいます。ここでも増水祈願といわれる大規模な雨乞いが行われているのです。

また、南方熊楠によれば、モンゴルに鮓荅師（やだち）と呼ばれる雨乞い師がおり、盆に牛の結石と水を入れ、呪文を唱えながら雨を降らせたといえます。

このように、雨乞いは、日本だけでなく、世界各地でさまざまに行われているのです。

3 水の神としての「お使い」である龍

ところで、神様の擬人化から、雨に関してはさまざまな言われ方をしています。「神様が

泣いているから雨が降ったんだよ」「雨の日は神様がおしっこしているんだ」などというのは、小さいころに聞いたことがある人もいないのではないのでしょうか。

これらの言葉の起源は全く分かりません。いつ頃からこのようなことが言われるようになったのでしょうか。また「泣いている」というのと「おしっこ」というのはずいぶん違いますから、その違いがどこから生まれてきたものなのか、など興味がつきません。

そもそも、日本の神様は「泣いたり」「おしっこをしたり」というように考えられていて、その神様が人間と一緒に国を作ってゆくというような感覚になっています。そのために、神様の行動も日本人の行動と同じような行動をとるとされています。というよりは人間が神様のまねをして同じような行動をとるようになったといった方が良いでしょう。ですから、日本の神様は、喜怒哀楽をしっかりと表現しますし、そのことがさまざまな災害につながったり、あるいは、豊作などの素晴らしいところにつながったり、はたまた奇跡を起こすような状況につながってゆくのです。

そして、その神様と人間との間を取り持っているものが、さまざまな自然現象や動物ということになります。

以前、熊野神社の鳥が神の使いであるとして、「あだな起請を1枚書けば、熊野でカラスが三羽死ぬ」といわれていたこと、そして、それを逆手にとって、高杉晋作が「三千世界の鳥を殺し、主と朝寝がしてみたい」というような都都逸を作ったというようなことを紹介しました。

さて、水神・雨の神様に関しても、お使いになる動物がいます。その代表格が「龍」「蛇」「河童」です。

「龍」「ドラゴン」という架空の動物は、世界各地で言われています。しかし、その位置づけは世界各国、というよりは宗教や神に関する考え方によってかなり違うようです。西欧文化におけるドラゴンは、基本的には忌み嫌われる妖怪変化の一つとして考えられています。なぜそのようなになったのか、諸説ある中の一つをご紹介します。

もともと西欧においては龍と蛇との区別はあまりついていなかったようです。狩猟民族であった西欧の人々は、人間とそうではないものの区別を、足の数でしていました。そのような中で、足がない蛇は、「正常な生き物ではない」と考えられてしまっていたのです。特にゲルマン系の伝説ではしばしば地下の洞穴をすみかとして存在し、地中の奥底から人を狙っているというような感覚になるのです。

ヨーロッパで蛇が嫌われていたというのは、ギリシア神話の「ゴーゴン」などを思い出せばあきらかではないのでしょうか。ゴーゴンは三姉妹で、ステノ（強い女、Sthenno）、エウリュアレ（遠くに飛ぶ女、Euryele）、そしてメドゥーサ（支配する女、Medusa）三姉妹です。神殿を冒涇した罪で醜い姿に変えられてしまいます。その姿は、醜い顔で猪の牙を持ち、見事な髪の毛は蛇に変えられ、長い舌が垂れており、青銅の腕と黄金の翼を持ち、手の先には鉤爪が付いています。そしてその姿を見たものが石に変えられてしまうといわれているのです。神話の中で英雄ペルセウスによって退治されてしまいます。

このような神話が残っているくらいですから、当然に、蛇やドラゴンが嫌われていたといえます。キリスト教でも、ドラゴンは悪魔の使いとされ、忌み嫌われていたのです。蛇でも嫌われていたのに、より邪悪になったドラゴンは、炎を吐き、蛇の胴体、鳥の翼と魚の鱗を有する動物であり、悪の四大元素を体現する最も邪悪な存在と考えられていました。しかし、ウェールズでは赤い竜が国の象徴とされ、また、アイスランドの国章に描かれている四つの守護者のひとつはドラゴンとなっているように、「邪悪」だけではなく「強いものの象徴」としての認識もあったのではないのでしょうか。

4 龍とドラゴンの価値観が正反対なヨーロッパと中国

一方、ヨーロッパにおいて邪悪とされていた動物を肯定の象徴としていた国があります。ほかならぬ中国です。

中国の龍は、「神獣」として、神の使いというような形になっています。また、ヨーロッパと異なり、古くから蛇と区別して龍が独立した概念であったようです。私たちがヒドロ慣れ親しんでいる十二支の中で、辰（龍）と巳（蛇）が別々に区分されていることでもそのことはわかります。

漢の高祖劉邦の出生伝説で龍が出てきます。劉邦の母劉媪が劉邦を出産する前、沢の側でうたた寝をしていると、夢の中で神に逢い、劉太公は劉媪の上に龍が乗っている姿を見たといわれます。そして、その夢の後に劉邦が生まれたのです。このように「龍」が現れるということは、ちょうどキリスト教におけるマリアやキリストが奇跡で現れるかのごとき扱いで、将来の予知のような形で出てくるのです。ヨーロッパで同じような夢を見て子供が生まれれば、その子は悪魔の子であるかのごとき扱いを受けたのではないのでしょうか。龍という動物への認識が全く違うので、このように全く異なる解釈になるのです。

さて、龍は、普段は水中か地中に棲むとされることが多いようです。龍は発する啼き声によって雷雲や嵐を呼ぶことができます。また、自分自身が竜巻となって天空に昇り、自由自在に空を飛ぶことができるとされていました。

龍の容姿もヨーロッパのドラゴンとは少し違います。蛇のような長い体に四つの足があり、口辺に長髯をたくわえ、喉下には一尺四方の逆鱗があります。顎下に宝珠を持っているとされ、その宝珠が命を司っているといわれています。宝珠は自分の手で持っているものもあるようです。

秋になると天から降りてきて、深い綺麗な水の淵の中に潜み、春になると天に昇るとされています。

このように「ところ変われば品変わる」ではありませんが、ヨーロッパとかなり違う、神々に近い形の龍になります。

この特徴のように、龍は、天界と地上を行き来し、そして神々と一緒に移動したり、あるいは単独で地上の自然現象を扱うようになるのです。特に、雲や風を、自分の力で動かすこ

とができたり、あるいは竜巻を身にまとって天に昇るといったような特徴から、水や風を司る神として当初存在していたようです。しかし、中国の長い歴史の中において、水が非常に貴重なもので水を支配することが国内を制するのと同じような意味になってきます。日本と違って、綺麗で飲める水がどこにでもあるわけではありませんから、水を司ることが、いかに大変なことか、そして水を持たなければ耕作物も何もできないということが、日本とは違って大きな課題になるのです。

そのようなことから、徐々に、「水の神」から、自然全体の神というようになり、そしてその「神」そのものではなく「天と地を行き来するから神の使いである」ということから「神に政治権力を任せられた皇帝」の象徴というようになるのです。

中国において、皇帝を描くときに龍を模したものを描いたり、あるいは、古代の皇帝の出土品に龍をかたどったものが多いのは、そのような意味合いがあります。

さて、そのような「龍」が、日本に伝わってきます。

なお、中国の龍に関する細かいところですが、龍は一般的に三本指とされています。実は、インド仏教の影響で、五本の指のうち二本はけがれた指、そして三本は神聖な指とされています。今でもインドで食事をする時に、三本の指で器用に食べる姿を見ることがありますが、この時に絶対に五本の指で食べることはありません。これは、二本の指はけがれているので、そのけがれた指でご飯を食べると病気になるってしまうとされているためです。また、その考え方が昭和の日本に伝わってきたのが、少し古い方ならば懐かしいアニメーションで「妖怪人間ベム」です。よく見ていただくと分かりますが、妖怪人間は、まだけがれた存在ですから、けがれを表す指二本がありません。そのために、妖怪人間ベム・ベラ・ベロはいずれも指が三本しかないのです。

しかし、中国の皇帝を示す龍だけは、五本指で描かれています。まさに、「皇帝は、神の代わりであるから、全てのけがれをも包含して浄化してしまうだけの権力と力を持っている」とされているため、その象徴である龍の指も五本あるのです。これに対して、日本などに描かれている龍は全て指が三本ですが、中国でも皇帝を示すもの以外の龍は全て指が三本になっています。

5 日本の龍神と恵みの雨と神々の水と

日本では、陰陽五行説や仏教などと同じ時期に、龍も伝わってきています。やはり、中国的な考え方になっているので、ヨーロッパ的な「悪魔の使い」ではなく、自然を司る神、または神の使いというような形で登場します。もちろん、蛇と龍とは別物という認識ですが、一部、水神というところでは一緒になっているところもあるようです。

日本の龍の特性としては、きれいな水の中に住み、たまに天に上るといったような形です。龍そのものが神というよりは、龍は天の神様が田畑や街に下りてくる時の乗り物といったような感じが強いようです。人間は馬に乗り、神は龍に乗るといったような感じでしょうか。

例えば、今昔物語集の中には「稲妻に蹴り殺される」というような表現があります。これは、稲妻というものはものすごい音と強烈な光の二つを兼ね備えています。古代、平安時代くらいまでは「光」は天上界、それも神の象徴でもありました。後の世になりますが『百鬼夜行』のように、光がなくなる夜になると鬼や妖怪が町の中に現れるというように信じられていましたが、それは、光、要するに神様の加護がないということによって、妖怪などが跋扈する環境になるというように考えられていたのです。

さて、稲妻に話を戻します。神様が下りてくるとき、当然に、神様は歩いてくるわけではありません。乗り物である龍に乗ってきますね。龍は、非常に大きな咆哮をあげながら下りてきます。そして天上界の光の世界から降りてくるので、強烈な光を帯びてくるということになるのです。稲妻の光は天上界から降りてきた光で、あの大きな音は、龍の鳴き声というように考えられていたのです。そして、その雷にあたって死んだ場合は、神様が下りてきた時の「龍の足に蹴り殺された」というような表現をするようになったのです。

奈良時代から平安時代、ちょうど今昔物語集が編纂されたころは、雷は龍であると考えられ、そのために天から神様が下りてきて恵みの雨を降らせるというような形になっていたのです。このように考えると、先に例に挙げた「皇極天皇の雨乞い」は、まさに、そのような背景から出たものです。単純に雨の降った量が多いか少ないかではなく、皇極天皇は蘇我蝦夷の時と違って「雷が鳴った」ということが大きなところになります。要するに、「皇極天皇が雨乞いをしたら、天上界から神様が下りてきてくれた」というようなことを多くの民衆は信じるようになったということになるのです。

この「神様の乗り物」であった龍が、徐々に、神様の乗り物ではなく、神様そのものと「同一視」されるようになります。これは、日本人の国民性でもあるところではないでしょうか。本物に対する敬意を忘れないようにしつつ、本物は恐れ多くてめったなことでは出せないもので、そのものの一部や、そのものの近くにあるもの、または似せたものなどを「同一視」して、本物と同じように扱って価値観を共有するというような手法です。「象徴性」というような単語が使われることもあります。身近な例を挙げれば、「社長の椅子」というような単語があります。椅子その物は単なる道具ですが、社長がいつも座っている椅子というと、それは社長と同じような価値観を持つように同一視されます。そして、いつしか、「社長になる」というのではなく「社長の椅子に座る」というような表現をするようになります。そのうち、椅子に「社長としての象徴」を感じるところがあり、その椅子を傷つけたり悪戯すると、社長そのものに失礼であるというように形になってしまいます。同じようなことは、江戸時代の「富士講」等でも発揮されます。富士山の石などを持ってきて小高い山の上などに置き、そこを参拝することで、富士山に昇ったのと「同一視する」というような習慣です。これについては、別な機会でも「講」という習慣をもっと深く学んでみたいと思います。

さて龍ですが、龍も、「神様の乗り物」だったのが、今例に挙げた「社長の椅子」と同じように「神様と同一視」されるようになります。このことによって「龍神」という神様のカテゴリーができ、そして、神様の乗り物というものから徐々に独立し、単体の神様の扱いに

なるのです。ここから二つの流れができます。一つは、龍神という神様を扱う伝説ですね。これは例えば秋田の田沢湖や滋賀県の琵琶湖、あるいは、今昔物語に出てくる龍神伝説にある、四国香川県のため池で、弘法大師が作ったとされる満濃池など、その地域に根差したきれいな水のある場所や湖や池などに様々な伝説が生まれてきます。琵琶湖の真ん中の竹生島には、龍を祀る神社に蛇の置物があったりもします。これにも伝説が残されているんですね。

一方、稲妻は、龍の姿というのではなく「雷神」という別な神様がいて、その神様が落ちてくるというような形になってきます。だから、雷をよけるおまじないに「くわばらくわばら」というものがあります。雷神は桑の木が嫌いということで、「くわばら」と唱えると雷が来ないというようなことがおまじないとして残っているのです。雷が神様と龍であるならば、桑の木などは全く関係ありませんから、新たな神が出てくることによって新たな習慣が生まれることになるのです。

梅雨の時期、雨と雨乞いを考えると、さまざまなことが日本人の中で出てきます。そして、はじめのうちは龍と考えられていた雷が、いつの間にか新しい雷の神ができてくるというような、日本人の考え方の柔軟性が、このような話からも出てきます。そしてその土地土地やその地域で、何か伝説や言い伝えが残っていて、それを子供や孫がゆっくり囲炉裏端で聞いていた、梅雨の長雨の日はそのように過ごしていたのではないのでしょうか。